

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



…情報を正しく理解し発信する市民科学者たち…

「とどけ鳥」の活躍に期待を込めて

近ごろ、講演会の質問で「またか」と思う質問が出てきます。専門家でも答え方に気を使う、極めて低い線量の被害を気にするような質問です。例えば、空間線量率が事故前の2~3倍程度上がった事に関する健康不安、「1ベクレルも取り込みたくない」とプールに子どもを入れさせない母親など…。もちろん、できる限り被曝は低くしなければなりません、極端な危険思想は如何なものかと考えます。

これまで、原爆や東海村臨界事故以外、私達は放射能と直接対峙することはありませんでした。

本当は、1950年代以降の大気圏内核実験による汚染はありましたが、情報が市民に伝わることはありませんでした。この事故の影響で放射能を測る装置が普及し、また、身の回りに食品の汚染検査が拡充してきた為に、情報を入手することができるようになったのです。

これ自体は大変良いことですが、私達市民に不足しているのは、情報を正しく理解するための機会が少ないことです。そのために不安を煽ることにつながっていると考えます。インターネットの普及により簡単に情報を入手できるようになった反面、その情報の真偽を判断するのは他人任せではないでしょうか？ 自己都合により情報を取捨しているのであれば、それは改めるべきです。

本来、勉強とは教科書や専門書の類いを読み、まとめることだと考えます。もちろん、学習会などで一緒に学ぶことも大切なことです。私も知らない農薬の食品汚染や遺伝子組換え食品の問題など、私たちの周りには気をつけたいといけない物質がたくさんあるわけです。その事に目をつむり、放射能の事だけを騒ぐことは、有識者や原子カムの住人を有利にするばかりです。知らないから安全なのではなく、知らないから不安がないだけなのです。

私達が知らなければならぬことはたくさんあります。放射能だけの被害ではなく、原発事故の被害により、こういった不安が募るのだという事も考えてください。

(木村 真三)



〈とどけ鳥一周年記念講演会（南相馬）にて〉

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター B1

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部（店番号 150）

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172（月・水・金 10:00 ~ 17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援中部

定期総会の報告(新理事長就任のご挨拶にかえて) (原 富男)

6月22日、チェルノブイリ救援・中部の定期総会が、愛知県名古屋市の「ウィルあいち」で開催されました。

総会では、2012年度の事業報告・決算に続き、理事・監事の選任、2013年度の事業計画・予算が提案され、書面による出席者も含め賛成多数で、承認・可決されました。

また、総会後行われた理事会で、理事長・副理事長の改選が行われ、理事長に私(原富男)、副理事長に神谷俊尚さんが選任されました。救援・中部の理事長は、理事の中から周り番で決められる慣習がありますので、特に感慨や気負いもないのですが、理事長選任に見られるように、「こだわりを持たない組織運営」が、チェル救らしさと考えています。その意味で、今後とも「風通しのよい」運営に心掛けたいと思います。

さて、今年度は、ウクライナでの「菜の花プロジェクト」の実験終了と福島第一原発事故から2年が経過し、新たな活動も、3年目に入りました。チェル救としては、従来の粉ミルク支援・被災者3団体支援・ナロジチ病院支援に加え、「ナロジチ／菜の花プロジェクト」の実用化支援など、ウクライナで成すべきことがたくさんあります。

日本国内では、南相馬市における放射線測定活動の継続に加え、「福島／菜の花プロジェクト」に着手することになります。事故後2年が経過し、民間企業による助成金が大幅に減少している昨今ではありますが、これだけはしっかりやり遂げなければならない事業ですので、皆さんの一層のご支援をお願いします。

この9月には、今年度の事業について話し合うために、私のウクライナ訪問が決まりました。その矢先、長年の友人であったホステージ基金のキリチャンスキーさんが亡くなったという訃報が届きました。長年にわたる氏の活動に敬意を表し、心からの感謝をささげご冥福をお祈りします。

我々のウクライナでの活動の柱であったキリチャンスキー氏の死去は大きな痛手です。今年度の活動をどうするか話し合うとともに、キリチャンスキーさん亡き後のウクライナ側の体制についても語り合うことになるでしょう。

<追伸> 前回のポレーシェにて、福島原発事故で被災された親子を長野県伊那市に呼び、保養プログラム「信州伊那谷リフレッシュツアー」のカンパを、呼びかけさせていただきました。掲載後、読者の皆様をはじめ全国各地、長野県内からも多くのカンパが寄せられています。7月18日現在、予定の50万円を超え、約90万円のカンパが寄せられました。お陰様で、計画通り7月末に3泊4日のツアーを開催できることとなりましたので、中間報告させていただきます。



【訃報】 ウクライナ「ホステージ基金」代表キリチャンスキー氏が

7月13日早朝、逝去されました。

私たち皆にとって、このお知らせは言葉では言い表せないほどの衝撃でした。私たちの協力と友情の年月を通じて、キリチャンスキーさんは私たちの最も信頼できる仲間でした。意見がくい違った時にも、私たちは、彼が純粋に私たちの共通の仕事のためを思って、自分の意見を主張しているのだということがわかっていました。もう彼の冗談や、お得意の三度目の[女性のための]乾杯や、暖かい友情にあふれた言葉を聞くことができないのが、残念でたまりません。ご冥福をお祈りします。どうぞ彼のご家族に、私たち皆の心からのお悔やみの言葉を伝えてください。

(竹内さん ドンチェヴァ氏宛メールより)

キリチャンスキー氏の魂は、私達の心の中に、いつでも、どこでも、そしていつまでも、生き続けることでしょう。(美)

ある"FUKUSHIMA"の医師から

南相馬市立総合病院医師 安藤 等

3.11 を境に世界は大きく変わったが、毎日は何事もなかったかのように過ぎていく。問題は更に根深くなっているというのに…。私は今、妻子を名古屋に残して、2013年4月から単身南相馬で仕事をしている。



◆ 10万人に一人が死亡するリスクは些細か？

2013年6月に、福島県県民健康管理調査検討委員会は、「福島県で検診を行った17万4千名の小児のうち、甲状腺がんと診断されたものが12名、疑いが15名いる」と発表した。委員会では、様々な理由をつけてこれを問題にしていけないが、既にチェルノブイリのペースを上回っている可能性も、指摘されている。安全論を説く人々は、10万人に1人が2人、3人に増えたところで大きな差はないと言う。でも考えて欲しい。その1人はただの数字ではない。名前があり、皆に愛され、暖かな温もりと大きな可能性をもつ、確かな生命なのだ。

◆ 今、福島はどうなっているか？

福島では、何もなかったように人々が行き交っている。しかし実際には、現在もかなり土壌汚染があり、例えば今年5月、福島市立図書館駐車場の植え込みでは、除染後にもかかわらず43万Bq/kgを超える放射性セシウムが検出されている。文部科学省の計算式で概算すると、43万×65=2,795万Bq/m²という、とてつもない数字が得られる。これは極端な例としても、福島・郡山市内では10万~30万Bq/m²のセシウムが検出されている。一方、チェルノブイリ原発事故では55.5万Bq/m²以上の汚染区域は強制移住が指定されている。何より、通称「ふくしま集団疎開裁判」において、証拠として採用されている東京電力の作業基準書では、4万Bq/m²以上の区域で作業する場合、頭部全体が保護具で覆われるフードマスク着用が義務づけられている。今の福島はそれほど危険な場所であるにもかかわらず、県民は「復興」の名の下に、現在も「被曝させられている」。

この裁判では、子ども達の生命・身体・健康にゆゆしき事態が進行しており、将来において健康被害が生じる可能性が高いと司法も認めている。しかし、子を想う親達の願いは、大いなる矛盾をはらんだまま却下された。判決だけではない。今、福島で被曝リスクを口にすれば、多くの県民から「非県民」とののしられる憂き目に遭う。「お前のようなのがいるから復興が遅れるのだ。風評被害が起きるのだ」と。家族そろって避難したくても、容易に仕事は見つからない。せめて母子だけでも避難させたいが、家族バラバラになるデメリットを考えるとそれもはばかれる。実際私自身、月に一度あるかないかのわずかな逢瀬の度、「お願いだから行かないで！」と泣き叫ぶ息子の小さな手を振り切りながら、この子の心をどれ程傷つけているかと思うと胸が軋む。

逃げることは難しい。残れば健康被害リスクがつきまとう。このような中、私達はどうやって子ども達を守り、生きていけばよいのだろうか。

◆ なぜ原発はなくなるのか？

これほどの災厄をもたらした原発を、なぜ止められないのだろう。政治家が悪いのではない。そのような政治家を選んでいる私達の責任である。お金欲しさに、経済の名の下、私達が原発社会をつくりあげているのだ。放射性物質の影響は全国に拡散し、公的機関による放射線の安全性に関する通知は、信頼できない事がはっきり示された。南相馬「とどけ鳥」のような、独立機関による放射線モニタリング体制を全国で確立し、連携する必要がある。何より、私達が犯している過ちが、子ども達の明日を確実に奪いつつあることを自覚し、それに気づいて、私達自身がライフスタイル・価値観の転換に目覚めることこそが、未来への扉を開く鍵だと訴えたい。

一介の医師の想いを伝える場を提供していただいた、戸村さんはじめチェルノブイリ救援・中部の皆様へ感謝を申し上げます。

南相馬便り

(神谷 俊尚)

第6期 南相馬市 放射能測定作業 (浪江町の測定を含む)

10月18~21日と10月25~28日の2回で実施します。
ご協力をお願いいたします。

(詳細は、同封のチラシをご覧ください。)

- ◆ 6月15日、「放射能測定センター・南相馬」(愛称:とどけ鳥)の設立一周年記念講演会が開催されました。

参加者は90余名、皆さん非常に熱心に、木村さん・河田さんの講演を長時間聞かれたことに、感銘を受けました。(詳細はp1, 6, 7, 8参照)

とどけ鳥は、5月末で満一周年を迎えました。1年間の実績は、測定依頼が3,445検体で、内訳は食品類41%、土壌41%、水類18%です。土壌が比較的多かったのは、市民の土壌測定を、行政含め何処も受け付けず、とどけ鳥が唯一受け付けたのが理由と考えられます。(野菜等の測定結果に関しては、とどけ鳥HPをご覧ください。)今年度は、7/17現在すでに1,100検体を超えています。

- ◆ この間、繰返し記してきましたが、ずさんで効果のない除染の実態が続いています。日本原子力研究開発機構(JAEA)発注の除染モデル実証事業で、請け負った業者が小高区の作業で出た汚染水609tを回収、水処理を269t行い、残り約340t(推計)を経費削減目的で、農業用水に使う飯崎川に流していた。業者の責任も大だが、深刻なのは除染管轄の環境省を支えるパートナーのJAEAが関わっていた事です。その上JAEAの幹部が「市には了解もらった。(市当局は否定している。)口頭で文章のやり取りはない。文章でやり取りしていたら除染は進まない。」「溜まって汚れたら、次はそこを除染すればいい」(7/12 福島民友)と、住民無視も甚だしく恐ろしいコメントを出している。これが除染の実態です。

- ◆ 6/25、飯館村小宮地区対象の「除染実施のための住民説明会」が、環境省と村の主催で開催されました。今回の除染実施内容は、住居・その周囲の樹木・農地を指します。主なやり取り…

住民「何のための除染なのか? どこまで線量を下げるのか? 何年かかるのか?」

環境省「できるだけ下げる。除染の効果は場所により違うので、はっきりと数値は示せない。長い取り組みになるが、地道にやらせてもらいたい。」

住民「環境省が言う『人が生活してよい被曝線量』とはいくつなのか?」

環境省「一律にどこまでという数値は持ち合わせていない。年間50mSvの所はそれ以下に、年間20mSvの所はそれ以下に…。」

住民「除染がうまくいかなかったとき、どうするのか?」

環境省「除染後に線量が元に戻る原因追究はできていない。申し訳ない。今わかるのは現場での作業方法だけだ。」

住民「何のための除染か? 直ちに中止してくれ。」

- ◆ 原発事故から2年4ヶ月が経過し、今だ15万人が県内外に避難し窮屈な生活を強いられています。20km圏内の小高区、双葉郡8町村と飯館村は、高線量、インフラ・コミュニティの崩壊、家屋は朽落ち、屋内はねずみ被害等で帰還できないのが現状です。その上、福島県民は他とは違った基準で被曝を強要され、健康被害の危険にさらされています。先進的法治国家と標榜する日本で、権利や義務が明らかに不平等に扱われています。住民の様々な要求や訴えの中に、この強い不信と怒りが貫かれています。国と東電は、分断と小出し補償を止め、住民に心から謝罪し、家族揃って再出発できる十分な補償を一刻も早く実施し、生活再建へと踏み出す方策を取るべきです。それが復興に向けた第一歩だと考えます。

- ◆ 昨秋、播種した「なたね」約8町歩の収穫作業を、7月第2週に行いました。収穫前に各圃場から検体採取し、各部位毎の汚染状況の調査も行います。収穫した菜種は、搾油して「なたね油」として販売、また秋の播種用として使用予定です。秋からは、20町歩以上の圃場を確保して、本格的に「菜の花PJ」に取り組む準備を始めています。ソーラーシェアリング6事業のうち、1事業に関して農業委員会の許可が出て、8月着工、9月初め完成の予定です。

第5期（第10次・11次）空間線量率測定結果（第2報）

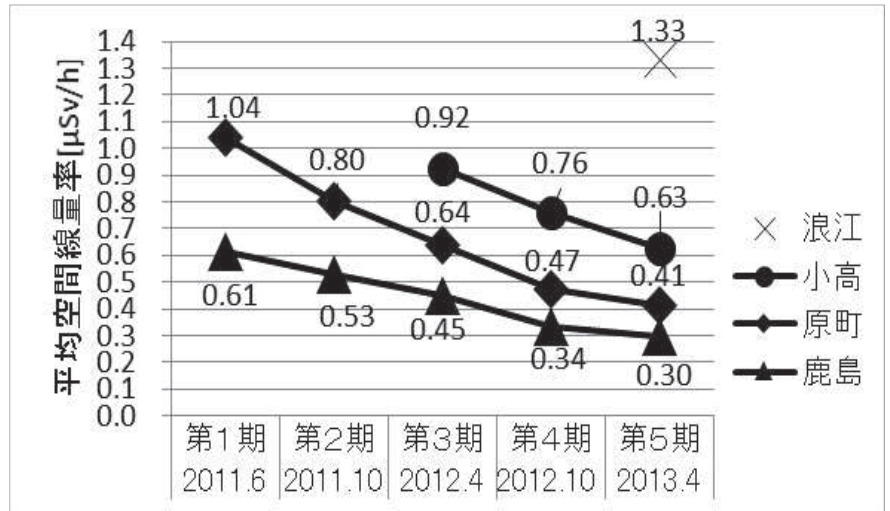
（池田 光司）

先回、「立入り可能な地域が広がるとともに、測定する地域を広げてきたこと」「浪江⇒小高⇒原町⇒鹿島と、原発から北に離れるほど放射線量が低くなっていること」を報告しました。

今回は、放射線量が事故後2年間で、どの程度減ったのかを詳しく見ていきます。

【図1】に、測定したブロックの空間線量率[$\mu\text{Sv/h}$]を地区毎に平均し、その値の推移を示しました。

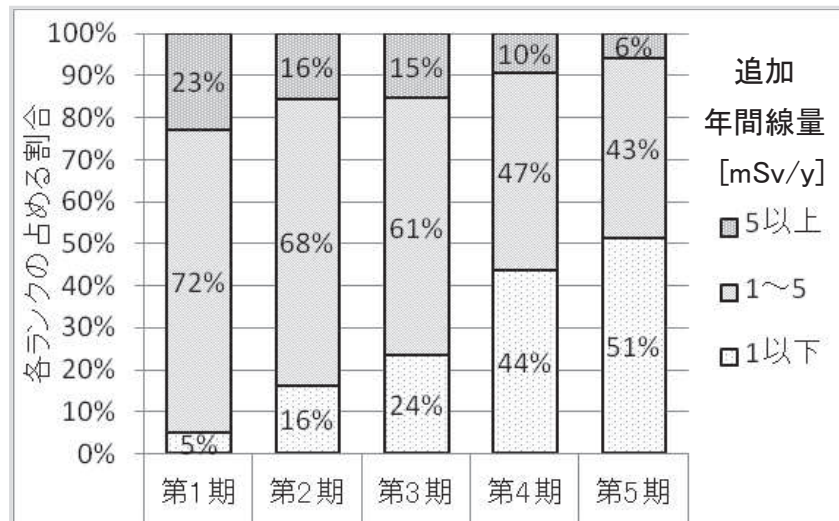
時を経るごとに空間線量率が下がってきていることがわかります。当初から測定をしてきた鹿島区は0.61→0.30、原町区は1.04→0.41と、ともにこの2年間で半分以下に下がっています。また、第3期から測定した小高区も、同じような割合で下がってきていることがわかります。



【図1】各地区平均空間線量率の推移

また、第3期から測定した小高区も、同じような割合で下がってきていることがわかります。この下がり方は、別途計算したところ、物理的半減期の約2倍の速さであることが確認できています。

【図2】には、各ブロックの追加年間線量（測定した空間線量率[$\mu\text{Sv/h}$]から、1年間で自然放射線にプラスしてどの程度の放射線量を浴びるかを計算で求めたもの）を、「1mSv/y以下」「1~5mSv/y」「5mSv/y以上」の3ランクに分けて、それぞれのランクの占める割合の推移を示しました（第5期の浪江町のデータは除く）。「1mSv/y以下」（=ICRP 勧告値）のブロックは、当初5%だったものが、時が経ち空間線量率が下がるとともに増えて、第5期では51%に達しています。一方、「5mSv/y以上」（=チェルノブイリで強制移住の対象となった値）のブロックは、当初23%だったものが、第5期では6%に減っています。完成したマップを見ると、全体的に線量が下がって、線量の低い地域が増えてきていることが明らかです（マップはチェル救のホームページで見ることができます）。



【図2】追加年間線量レベルの推移

このように空間線量は下がってきていますが、まだほとんどの地域で、自然放射線量の数倍以上の線量があります。また、とどけ鳥で測定されている土壌には、平均して1000Bq/kg以上の放射性セシウムが含まれています（通常は、数10Bq/kg）。外部被曝の影響は減ってきていますが、内部被曝には注意を要する状況が続いています。

次回、【第3報】は、今回の測定データから読み取れることを、もう少し詳しく見てまとめます。

特集!! 「放射能測定センター・南相馬」の開所一周年とこれからの方向性

(小林岳紀)



平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災と、それに伴う福島第一原発事故により警戒区域に指定された事で、強制的な避難開始を余儀なくされた私共夫婦は、息子を頼って愛知県豊田市で約 11 ヶ月間お世話になりました。

遠く離れた愛知県では、月一回、愛知県被災者支援センターから送られてくる地元紙のコピーのみで情報が少ない中、「近いうちに警戒区域の見直しがあり、帰還が可能になる」との話を聞き、平成

24 年 2 月、警戒区域に隣接する仮設住宅へ転居することにしました。

その間にお会いした愛知県被災者支援センターの方から、愛知県を拠点とした NPO(チェルノブイリ)救援・中部)が南相馬市への支援活動を行っているとの聞き、平成 24 年 4 月 16 日に警戒区域解除準備区域へ再編成され、立入が自由になった小高区で、同団体が行っていた「南相馬市放射線量測定活動」の測定ボランティアとして参加させていただきました。そこで知り合った神谷さんから、平成 24 年 6 月に「放射能測定センター南相馬」を発足させると伺い、引き続き測定ボランティアに参加させていただきました。早いもので、今年の 6 月で開所一周年を迎えました。

今年春頃、「開所一周年記念の行事をどうするか？」の話し合いで、講演会の開催が決まりました。日々、行ってきた測定の結果を、広く南相馬市民の方々へお知らせする良い機会だと思われた為です。

日々の測定では、持ち込まれた野菜類などを測定して、結果を報告書に整理する作業の繰り返しですが、その測定データは三千余件にもなり、有用な情報であるとの自負もあります。畑や家庭菜園で育った野菜類が、どの程度放射能に汚染されているか、測定で確認された点を河田先生にまとめていただき、講演会で報告していただきました。また、木村先生の講演では、空間線量で示される外部被曝の他、当地域では今後は内部被曝に注意を要するとのお話で、当測定センターで行っている野菜類などの食品汚染測定にも通じる、タイムリーなテーマでした。

お話の中で木村先生は、色々な事柄について、「判らない」と回答していた事が非常に印象的でした。巷では、判明していない事柄に対して、曖昧にしたまま結論的に「安全」などとする説明に多く接してきた中で、むしろ誠実かつ明確な回答ではないかと思いました。

私達の「放射能測定センター・南相馬」が、今後引き続き行ってゆく活動は、「地道に放射能測定を継続させる事」の他、「独自の視点による補完的なデータ収集を行って、データの有効性を向上させる事」「それにより知り得た情報を、広く市民の皆様へ伝達周知させる事」だと考えます。

補完的なデータ収集の一例として、当センターの若手ボランティアの森田君が行っている「南相馬市の河川毎の試験体収集と、測定結果の整理作業」があります。河川毎に区分して、土手の土壌・河川底の土壌・表層の河川水の調査を行ったところ、土壌汚染は、新聞紙上で公表された「スピーディ」で示された汚染地域と、ほぼ一致したデータが得られました。しかしながら、河川水のセシウム数値は、概ね「不検出」のレベルであり、「セシウムは川底に沈殿し、上澄みの河川水はきれい」という状況が判った事は、画期的と言えるでしょう。この様に、気付いた点を実際の測定を通じて立証的に確認する姿勢を持ち続け、木村先生が述べていた「市民科学者」に一步でも近づけたら、と思います。開所時から一年目を迎えた現在の測定結果からは、大幅な数値の減少が見られ、放射能汚染の実態はよい方向に向かっている事は確かですが、まだ測定を終わらせる時期には至っていないと感じます。

一周年を迎え、「色々な人々に出会えたと思えばそれも良し」の心境で、この関わり合いを大切に、引き続き測定ボランティアを続けて行きたいと思います。



〈川の水を採取する森田さん(山神大橋の下で)〉

正しい知識を身につけ、自らの頭で判断し、行動する！

(若林 康雄)



「地元、南相馬の復興のために何か役に立てないか？」と、市民活動サポートセンターで市内の活動団体を探していたところ、「放射能測定センター・南相馬」の存在を知り、今回の講演会に参加しました。今回の講演会を通して、内部被ばくを防ぐために放射線量を正確に測り、情報を共有することの重要性を、あらためて認識しました。

当日の講演会で木村先生がお話しされていた、チェルノブイリ原発事故後のウクライナの状況は、あまりにも悲惨すぎるものでした。避難できない住民が、経済的に十分な支援を受けられず、放射能汚染された土地で生産した農産物を摂取することで、基準をはるかに上回る内部被ばくに曝されている現状を、目の当たりにしたからです。放射能汚染で奪われた住民の生活の補償に、ウクライナ国家は本気で取り組む姿勢はあるのか？ 私は憤りを覚えました。一方で、基準を超える被ばくを受けている中でも懸命に生きる住民の皆さんと、木村先生をはじめとした研究チームの方々を支援できないか、できることから始めたいと考えるようになりました。

私たちが現在の生活で最も注意すべき点は、食品からの内部被ばくとのことで、チェルノブイリ原発事故後の状況を考えても、まずは、普段口にする食品に注意を払うことが何よりも大切だと思います。特に福島県では、市場に出荷される食品はすべて放射能測定が行われ、基準をクリアしたもののみ出荷されるという仕組みができているため、これを継続して実施していくことが、食品による内部被ばく防止につながると思います。

私が最近読んだ「ホットスポットネットワークでつくる放射能汚染地図 (NHK ETV 特集取材班著)」に掲載されていた木村先生のインタビューの中に、これからの福島県民が生活するうえで大切なことが書かれていました。「地域の人々が放射線に対する正しい知識を身につけ、自らの頭で判断し、行動する。それがこれからの福島の人々に必要な態度なのです。」私もこれを実践していきます。

とどけ鳥一周年記念講演の片隅で… (市原 佳代)

講演会当日は、あいにくの雨模様。しかし、来場者は1時間前から続々と集まり始めました。

南相馬でとどけ鳥を応援してくださっている方々も多く、いっしょに受付を担当した、とどけ鳥ボランティアの玉川さんは、来場者の方々への挨拶に余念がありません。受付に置いた「測定マップ」に、皆さんの熱い視線…。講演会の来場者は、放射線の問題に関心の高い方ばかり。受付時にも、ご自宅で栽培された作物への不安を口にされる方など、2年間の南相馬での日々の暮らしは、常に放射能との対峙だということを、改めて突き付けられました。

講演会が始まって、会場に駆けつける方は後を絶ちません。すると、一人の男性が壁にはってある測定マップを真剣に見始めました。その人は、同じ建物の別室で行われている「除染土」養成講座の参加者。九州から出てきて、3日後より小高区での除染作業に入るそうです。測定マップの小高区の辺りをしっかりとみつめている姿が、印象的でした。

会場は原ノ町駅の前にあり、震災後駅ホームにずっと停まっている特急「スーパーひたち」が見えました。まだ何一つ終わっていないこの町で、人々が心を痛めることを少しずつでも減らすこと、その役割が私たちにあるのだな、と思った一日でした。



「放射能測定センター・南相馬」一周年記念講演会報告

(戸村京子)

「南相馬市・浪江町 汚染マップから見える現状」河田 昌東氏(要約)

まずは正しい事実を知ることが大切であり、それに対処することが被ばく対策となる。南相馬市で始めたことは、①道路上など生活空間での線量を測定して、市内の汚染マップを作成する。②「放射能測定センター・南相馬」で、食品・土壌の測定を行う。③自分で測定してもらおう。そのため、ウクライナのチェルノブイリ被災者から贈られた放射能測定器(125台)の無料貸出しをする。

放射能測定センター前で毎日測定して、0.38 マイクロシーベルトあった数値が0.1ほど下がってきている。南相馬での第1期測定では、1ミリシーベルト/年未満が5.1%、1~5が72.1%、5以上が23%だったが、第5期ではそれぞれ51.5%、42.6%、5.9%となっている。

下がっている原因として考えられることは、①セシウム134(半減期2年)とセシウム137(同30年)の比率が、チェルノブイリ事故では1:2、福島の場合1:1で、半減期の異なる放射性物質の割合の違い ②雨に洗い流されるなどの環境要因で、物理的半減期より早く減っていること。

市民科学者養成講座「チェルノブイリ原発事故・内部被曝調査から見えてくるもの」(要約)

木村 真三氏 (獨協医科大学国際疫学研究室福島分室、NPO 法人放射線衛生学研究所)

JCO 事故の時、“原発安全神話”はありえないと感じ、原子力事故が起きたら、世界のどこへでも駆けつけなければならないと思った。ウクライナのナロジチ地区の村の調査で、結節性甲状腺腫の妊婦さんと出会い研究を始めたが、京大の今中さんとチェルノブイリの河田さんのお二人が、自分の研究にとってキーパーソンとなった。

福島事故の3日後の3月15日に、NHKの報道グループとともに現地に入った。その日の午前10~12時に東京上空を放射能雲が通過していて、その東京の空気を採取して京大の小出さんに測定を依頼して、自分は現地で土壌や草を採取した。2013年にジトミル農業生態学大学で行った講演会では、あふれるほど学生が集まり、チェルノブイリ事故から25年経っても若者が大きな関心を持っていた。日本の福島でも真実を伝えて、「市民科学者」を養成していかなければならないと考えている。セシウム137と134の放出比から、チェルノブイリでは影響は長く続くが、福島では初期の影響が強い。福島原発の爆発は水素爆発で、原子炉の燃料の飛散は少ない。ただ海洋への影響は未知数である。

ナロジチ地区には1万人が取り残され、年80ドル程度の収入で、安全な食品代として支給される1ヶ月25円では、自家菜園のものを食べざるを得ず、内部被曝が増大している。ウーシ川が雪解け水で氾濫し、窪地にセシウムが濃縮して、放牧された牛が草を食べ、牛乳が汚染されている。5家族の「陰膳方式」食事調査で、2家族から250ベクレル/kgの牛乳があった。2011年の調査では、じゃがいもときのご料理20,100ベクレル/kg、きのこ入りペリメニ10,500ベクレル/kg、ボルシチ3,500ベクレル/kg等だった。ナロジチ病院では、子どもには免疫力の低下、甲状腺異常、食道炎・胃炎(塩分の多い食事のため)が多く、大人には心疾患、乳がんなどが発症している。

チェルノブイリでは、26年経っても今だに高濃度の食品汚染が起きている。改めて食品汚染のコントロールの重要性を示している。現在、疾病との因果関係を調べている。旧ソ連では心理学が否定されていたが、メンタルな被害についても調査の必要がある。福島とチェルノブイリの両方を見ていくが、放射能との戦いが今後も続く。



琉球大学によるヤマトシジミの研究

チェルノブイリ原発事故では、汚染地域で小鳥や昆虫などが突然変異を起こし、汚染レベルに応じて生存率が減少している、という研究が報告されている(ボレーシェNo.115 連載 70 参照)。今回、福島原発事故後いち早く現地に入り、ヤマトシジミ蝶の調査を行った琉球大学大瀧研究室の調査結果を紹介する。この報告によれば、福島でもヤマトシジミに大きな異変が起こっている。

自然界の変異は、いずれ人間にも反映される恐れがある。事実を見据え、放射能にいかに対処すべきか考えよう。

ヤマトシジミの研究

琉球大学の琉球大学の大瀧研究室によるヤマトシジミの研究は、Nature 電子版 (**SCIENTIFIC REPORTS**|2:570 | DOI: 10.1038/srep00570) に 2012 年 8 月に紹介され、ヨーロッパでは大きな反響を呼んでいる。研究者らは、福島事故から 2 ヶ月後の 5 月に現地に入り、日本に広く分布している小型の蝶「ヤマトシジミ」を採集し、様々な分析を行った。

それによれば、

- (1) 目や羽、触覚に明らかな突然変異が見られ、沖縄に持ち帰って飼育を続けると、2 世代目・3 世代目にもその変異は遺伝し、突然変異の割合は世代を追うごとに大きくなり、死亡率も増加した。
- (2) 変異の割合と死亡率は、採集した場所の空間線量率が高いほど大きかった。
- (3) 最初の調査から 4 ヶ月後の 9 月に再び現地調査すると、5 月に比べて自然界での突然変異の割合は明らかに大きくなり、実験室での数世代の飼育結果を再現していた。
- (4) 沖縄で採取した(汚染のない)ヤマトシジミに Cs137 による外部照射を行うと、照射線量に応じて(55mSv、125mSv)突然変異の割合が増加した。
- (5) 沖縄のヤマトシジミに福島の飯舘村や福島市内で採取した食草(カタバミ)を与えると、食草の汚染レベルに応じて生存率や突然変異の割合が増加し、内部被曝の影響が再現された。

こうした放射能による自然生態系に対する影響の研究は、チェルノブイリでもフランスやアメリカの研究者らによって行われ、マルハナバチや蝶々、バッタやトンボ、蜘蛛等の生息数が、汚染レベルに応じて減少している

ことが観察されている。

(A.P.Moller & T.A.Mousseau 2009)

この琉球大学の研究で特に重要なのは、内部被曝の影響に関する実験である。山口県宇部市で採集したカタバミを与えても、ほとんど異常は観察されなかったが、福島市のカタバミ(Cs 合計 15, 971Bq/Kg)や飯舘村のカタバミ(20, 662~88, 457Bq/Kg)を与えた沖縄のヤマトシジミは、幼虫から蛹・成虫へと進むにつれて死亡率が増加し、生存率は約 50%まで低下した。明らかに食草の汚染による内部被曝が原因といえる。



<内部被曝による奇形>

根拠のない非難と研究費打ち切りの弾圧

この論文は、ヨーロッパなどで大きな反響を呼んでいるが、国内ではこの研究についてネット上で根拠のない(原論文を読んだと思われぬ)誹謗中傷が飛び交い、文科省は最近、この研究に対する研究費を打ち切った。「放射能による影響は子孫に伝達されない」というこれまでの政府見解を、覆す可能性があるからだろうか。

原発の是非に関する意見の相違はともかく、こうした科学研究までも否定する風潮は、決して許してはならない。事実を真摯に見ることからしか、未来は生まれてこないからである。(河田)



【南相馬の農業再生をかけた菜の花PJの成功を願って！】

「花火は上がるの?」「屋台は出るの?」。7月4日当日、朝から4人で準備していると、近所の人や車で通りがかった人から「何やってるの?」と声をかけられました。菜の花プロジェクトを知らない人たちでした。使ったキャンドルは約1,200個。キャンドルに火を灯すのも、消えたキャンドルに火を灯すのも参加者と一緒。菜の花畑に、200個のキャンドルが幻想的な雰囲気を作り上げ、1,000個のキャンドルで描いたつもり?の「菜」の文字は、集まった人たちのなごやかな話し場となり、お祭りでもないのに、「再会と出会い、出発」が産み出されるようなムードあるイベントになりました。

予想以上の参加者とひばりFMの中継もあり、菜の花PJのPRにもなりました。「こういうことは継続してやらなきゃ!」と準備を手伝ってくれたメンバーに感謝。

【思いも、希望も届ける「とどけ鳥」の活動】

6月26日、ウクライナから届いた「クリスマスカードのお礼のメッセージカード」を、「原町区の青葉幼稚園と聖愛保育園に届けてきました。先生にもお迎えで居合わせたお母さんにも、目を輝かせて喜んでいただきました」とブログにも書きました。「子ども達も喜んでいました」と、その後、測定センターの事務所に幼稚園の先生が、写真付きの感謝のメッセージと手紙を持ってきてくれました。それはまた、ウクライナの子供達のところに届けます。

これまで砂場の砂など、地域の幼稚園や保育園からのいろいろな測定を行ってきました。「放射線量率マップ」も半年毎に配布しました。築き上げてきた信頼関係。放射能測定だけではなく、とどけ鳥は活動を通じて繋がります、ウクライナ⇄日本⇄チェルノブイリ⇄南相馬を…。



決して忘れてはいけない (瑞浪市 大島 正弘)

4月の「第10次 南相馬市放射能測定」に、瑞浪市内の有志2名とともに参加しました。車中にて、放射能測定器の使用法の講習を受け、初めて手にした測定器の取扱いに緊張しました。飯館村は全村避難中で、工事車両に出会うだけで、村の家々はカーテンを閉め静まり返り、道路脇の各所には除染の際に集積された黒いビニール袋が野積みされた異様な風景でした。1日目は、地元ボランティアの方と二人一組で、原町地区32ヶ所の測定を行いました。ボランティアの方は大阪出身の35歳、一年半前に仕事を辞めてボランティアをされていました。「自分は仕事人間で13年間仕事一筋で、放射線関係の仕事をしていた。ある程度の蓄えもあったので、思いきって南相馬市へ来た。来てよかった。」とのこと。私は若い人から、人生の過ごし方を教えられたような気がしました。測定した放射線量は、相対的に山の方が高く、海に近い方は低かったです。測定中、住民の方が「ご苦労様です」と声をかけてくださいました。測定後、昼間のみ立入り解除された「小高区」を視察しましたが、被災を受けたままで放置されている姿を見るに付け、気持ちの休まる処がありませんでした。原発事故さえなければこんな哀れな姿は見ることもなく、綺麗に片付いているはずであると感しました。翌日は、鹿島地区の山間部を測定しました。案内の地元の方は、お国言葉で一生懸命説明してくださいましたが、私は言葉に慣れていない為、道中の会話には苦労しました。しかし親切心が伝わる一日でした。測定中に、南相馬市の正午を知らせるミュージック「我は海の子」が聞こえてきました。案内して下さった方は、「震災の津波を思い出す。この音楽は変えてほしい。市役所は何も感じていないのだ」と、強い口調で言われました。ただ、相槌を打つのが精一杯でした。

測定値は、最高で1.78μsv/hでした。合計64箇所の測定を終え、ボランティア活動は終了しました。4日間の滞在では、被災者の人達の哀しみ・苦しみ・大変さを理解する事は充分できませんでした。それでも、「自分の目で見、耳で聞いた事は、決して忘れてはいけない」と心に誓いました。

ウクライナの学生への支援に感謝を込めて

エヴゲーニャ・ドンチェヴァ

日本の奨学金基金のジトーミル州での責任者

ナロジチに仕事で行った時、私たちは地区病院に立ち寄りました。地域の医療の現状を知るためです。その時、まだ若い看護師の女性が近づいてきて、小声で尋ねました。「私のこと、覚えてられますか？皆さんの奨学生ですよ。」

このようにして思いがけず、看護大学の奨学生だったユーリヤ・ルスィンと再会しました。ユーリヤの話は、まだ彼女の在学中、履歴書などの書類を持ってきた時に、私たちの心を動かしました。彼女の謙虚さは驚くほどでした。聖職者の家庭で生まれましたが、母親はユーリヤが5歳の時交通事故で亡くなり、父親は彼女とその妹弟を男手一つで育て上げました。彼女は子どもの時から医学の道に進むことを夢見ており、またチェルノブイリ事故後に健康の問題も生じ、ジトーミルに行き、当時の医学専門学校に入学することにしました。生活は楽ではありませんでした。実家から遠く離れ、家族の収入はわずかで、まだ2人の妹弟がおり「立派な医療従事者になって人を助ける」という責任を、常に感じていなければなりません。ですから、日本の奨学金基金から追加の奨学金を提供されるという決定は、彼女にとって大きな喜びでした。

6年後に彼女はこう語りました。「私はそのお金を無駄に使ったわけではなくて、勉強のために（ノートとか本とか）必要なものを買いましたし、薬を買わなければならなかったこともありました。父がよく言っていたように、『余分なお金というものはないし、賢い使い方をするならなおさら』です。卒業後、私は故郷に戻りました。事故後すぐに移住させられたのですが、私は生まれ育ったポーシェで働き、暮らしたかったんです。今私は、ナロジチ地区病院の処置室で、看護師をしています。病院では愛され、大事にされていますし、私もそれに応えるよう頑張っています。」

私たちの奨学生の運命は多くこれに似通ったものですが、ユーリヤのケースは、うれしいことに私たちの支援が、役立っていることを裏付けています。さらにもう一つの物語があります。

スヴェータ・コヴァリンスカヤも看護大学で勉強したのですが、彼女の場合は産婦人科コースでした。彼女についての最初の情報は本人の作文でしたが、それは純粋さとロマンの香りに満ちたものでした。彼女を育てた祖父母について、生まれて子ども時代を過ごした土地について、キノコやベリーを探して歩いた森について、どんなに多くの善良な言葉が費やされていたことでしょうか。私は、キリチャンスキ

ーが、この子は将来物書きになれるよと褒め言葉を言ったことさえ覚えています。そして今、彼女はマルィン市の地区病院で働いており、結婚して、子どもを持つことを考えています。スヴェータが仕事の面でも成長しており、医大を受けるという夢を持っているのはとても嬉しいことです。

2012年、奨学金基金のプログラムは終了し、最後の奨学生（キエフ市の国立医科大学の学生）が社会人となって、私たちはいつものように考え始めました——このプロジェクトの課題を果たすことができただろうか…と。私たちの主要な課題は、チェルノブイリ事故によって被災した地域の出身の学生たちを、金銭的・精神的にサポートするというものでしたが、私の考えでは、彼らのその後の運命への私たちの関与は、より大きな意味を持つものでした。しばしば、元奨学生たちは、勤め先、特に医学関係の職場を探す手助けをしてくれないかと言ってきました。私たちの「チェルノブイリの人質たち」基金は、州内の多くの医療施設と協力しているからです。何人かの奨学生と私たちは、市民運動の分野でのパートナーになりました（レーナ・クリヴォイは自分の団体を創立しました）。私たちは彼らの成功に喜び、彼らの問題に心を痛め、そしていつでもささやかながらも支援をしようとしています。今、「奨学金基金の子どもたち」が何人いることでしょうか！ 私たちはまた、彼らの運命に関わったり、あるいは単に誇らしげで幸せそうなママやパパの、生まれてきた子どもたちについての話を聞いてあげたりするのです。こうしてこの13年間、私たちは111人の奨学生を支援してきました。43人が医学を修め、35人が教育学を学び、30人が農業の専門教育を受けました。看護大学の奨学生3人が、その後ウクライナでも屈指の大学であるキエフ国立医科大学で勉学を続けたことを、誇りを持って報告することができます。彼らは人々に奉仕する職業である医師の道を選んだのです。そして私たちは、これら奨学生の一人一人が、日本の奨学金基金の奨学生だったのだと誇りを持って語ることができ、かくも遠く、かくも善良な国である日本、人々が富のことを考えるのでなく、将来の世代に、特に罪もなく原発事故で被災した若者たちに配慮をしている国のことを、以前よりも少し近く感じることができるようになったであろうと大いに期待しています。

これが、パートナーである「チェルノブイリ救援・中部」に、このプロジェクトの私たちのジトーミル州での実施を提案してくれたことに対し、限りなく感謝している理由です。そして最も大事なことは、皆さんがこちらの人たちに、善良な心の発露と金銭的な支援は、困難な大人の人生への入口で大きな後押しになり得ると理解させてくれたことなのです。

事務局便り

訃報はいつも突然舞い込む。なんということか。21年もの月日を、チェルノブイリ被災者の支援のためにともに手を携え、時には激しく議論しながらも活動を続けてきた、我がカウンター・パート、チェルノブイリホステージ基金の代表、ウラディミール・キリチャンスキー氏が亡くなった。享年72歳。ジャーナリストとして、チェルノブイリ原発事故当時、現場取材を続け、その後も腐敗する政治家や権力に対し、ペンで闘うジャーナリストとして活躍し、チェルノブイリ被災者のために働き続けた。「チェルノブイリは消える事の無い痛み」と語り、その風化を何よりも憂い、活動を続けた。自らの竿で魚を釣ろうと努力しない被災者、そして口先だけの支援者へも、歯に衣着せぬ舌鋒を鈍らせる事はなかった。また、福島第一原発事故後、いち早くウクライナでフクシマ支援を呼びかけてくれたのも、同じ不幸の痛切さと、それを分かちあう事がなによりも大事であることを知っていたからだろう。

ここ数年、病魔との厳しい闘いを強いられつつもクリアし、6月20日に直腸ポリープ手術をするもすぐ職場復帰し、7月初め「いつも通り仕事をしています。キリチャンスキーの体調はいいです」と、ホステージ基金のドンチェヴァさんからメールが入ったばかりだった。…無念。

キリちゃん！（私達はそう彼を呼んでいた）あなたに出会えたから、私達はここまでやってこれたのだと思います。長い間、本当にありがとうございました。さようなら。（山盛）

☆ご寄附の報告☆ 総額：619,765円（6月～7月12日）

ご支援くださった皆様、ありがとうございました。私たちの活動は、皆様のご寄附によって支えられています！

●ミルクキャンペーン	8,000円	ウクライナへ贈るミルク代に充てます。
●被災者支援(ウクライナ)	10,000円	ウクライナの被災者が使う医薬品代に。
●菜の花プロジェクト	12,000円	菜の花プロジェクトに。
●福島原発被災支援	114,000円	福島での活動費やとどけ鳥の支援に。
●指定なし(一般寄付)	355,762円	} 団体の活動費や運営費に充てられます。
●賛助会員費(議決権なし)	60,000円	
●正会員費(議決権あり)	60,000円	

☆支援者からの声☆

「なかなか講座にも出席できませんが、救援・中部が続きますように！」（岐阜県養老郡）

「親子リフレッシュツアー応援しています。」（大分県中津市）

「読み応えのある会報ありがとうございました。」（名古屋市熱田区）

（兼松）

編集後記

☆「お先に花を咲かせましょう」南相馬市小高の駅前の花壇には、そんなメッセージが掲げられた季節の花が咲いている。お一人で始められた「町おこし」活動、芯の強さを感じます。（佳）

☆もうキリ氏には会えない…懐かしい人との思い出は写真だけでは足りない。その声、そのしぐさや対応を受けて体感する。にぎやかに卓を囲んで歓談した時間をいつまでも覚えていたい。（美）

☆「年間100ミリシーベルトだって安全だ」と、原子カムの犯罪を隠蔽する御用学者たちがいる。「放射能で日本はもうおしまいだ」と、パニックをあおる自称市民活動家たちがいる。「おかしい？」と感じた時は、その活動資金の出所を追いかけることだ。前者は「原子力利権」、後者は「石油利権」に辿りつく。市民科学者ならば、そのからくり(マッチポンプ)にも気付くはずだ。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473